

国立歴史民俗博物館総合展示 第1室(原始・古代)の新構築事業 2015年度活動報告

Renovation Project of the Permanent Exhibition Gallery One (Prehistoric and Early Japan)
of the National Museum of Japanese History : FY 2015 Activity Report
SHIBUTANI Ayako and KAMI Naomi

渋谷綾子・上 奈穂美

はじめに

本稿は、国立歴史民俗博物館総合展示第1室新構築事業（以下、第1室リニューアルと略）における2015年度の活動に関する記録である。前稿〔渋谷, 2014; 渋谷・上, 2016; 渋谷・大塚, 2015〕と同じく本稿においても、第1室リニューアルの準備状況や展示リニューアル委員会の概要を示し、現在の展示構成や設計状況について可能な限り精緻な記録を残すことを目的とする。

本稿では、2015年度に進められ、実施設計の完成をみた各テーマの構成内容、および展示予定資料の調査、複製資料・大型模型の製作状況について報告する。

1 第1室リニューアルの展示構成と実施設計

第1室リニューアルの展示構成は第I期展示の課題をふまえている〔大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館, 2004; 渋谷, 2014; 渋谷・上, 2016; 渋谷・大塚, 2015〕。2015年度は、基本設計（展示構成の全体設計）にもとづいた詳細設計（実施設計）を完成させるため、展示テーマの構成や展示資料の配置図、映像などのデジタルコンテンツ、展示解説パネルや遺跡地図、写真図版等のグラフィックリストの作成について、実施設計図作成業者の（株）日展と各テーマ担当者との間で詳細に検討した。さらに、実物資料や複製資料、大型模型、復元画などの展示予定資料の選定・製作を継続するとともに、各テーマで要する諸費用や展示工事の全体にかかわる費用の検討も行われた。

これらは展示リニューアル委員会の全体会議（2015年7月）と館内委員会議の双方で最終的な検討を行った後、2015年9月30日に実施設計が完成した（図1）。各テーマの展示構成は表1のとおりである。

2 2015年度の活動概要

2015年度前半は、前述したように、館内の第1室リニューアル委員と日展による詳細設計の作成作業を続け、諸費用の検討を行った後、実施設計図一式を完成させた。後半は、完成した実施設計

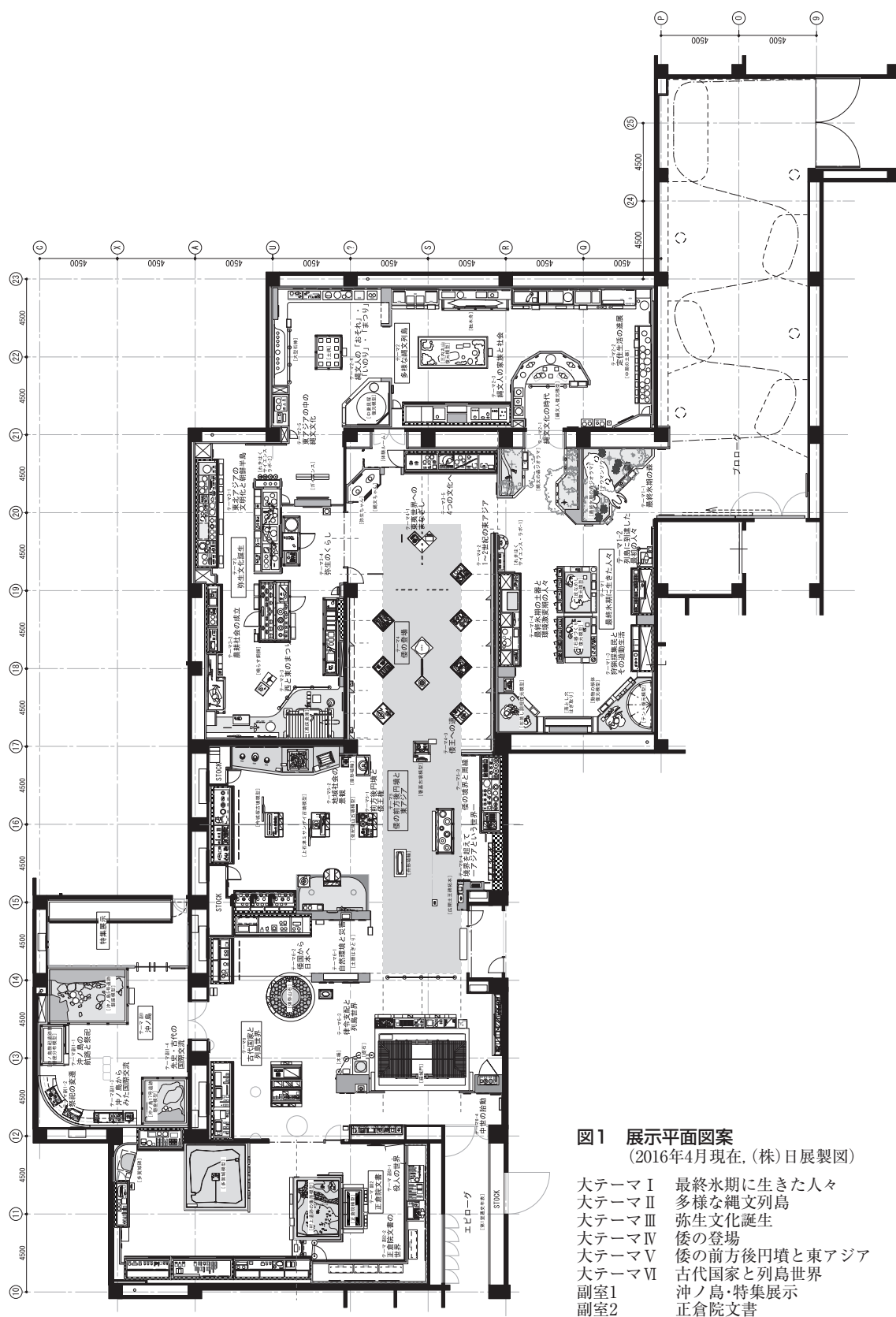


表1 リニューアル後の展示テーマ構成

I 最終氷期に生きた人々

プロローグ 最終氷期の地球とホモ・サピエンスの拡散	
1 最終氷期の森	① 最終氷期の森
2 列島に到達した最初の人々	② 現代人的行動ってなに!?
	③ 人はいつ列島に渡ってきたのか
	④ 列島最初の人々が残したもの
	⑤ 環状のキャンプに集う
3 狩猟採集民とその遊動生活	⑥ 寒冷環境への適応
	⑦ 石器を作る
	⑧ 遊動生活と住居
	⑨ 良質の石材を求めて
	⑩ 大陸との関係
	⑪ 動物の狩猟と食料
	⑫ 旧石器時代の落とし穴
	⑬ 植物質の食料の利用
	⑭ 祈りとアクセサリー
4 最終氷期の土器と環境激変期の人々	⑮ 東アジアの土器の出現
	⑯ 土器文化の急速な広がり
	⑰ 定住的な生活の始まり
	⑱ 狩猟具の変化と弓矢の登場
	⑲ 南九州の集落と植物利用
	⑳ 石偶と日本最古の土偶
[コラム] れきはくサイエンス・ラボ 拡大してみる	

II 多様な縄文列島

1 縄文文化の時代	① 縄文文化の環境
	② 縄文人登場
	③ 縄文文化のはじまり・おわり・ひろがり
	④ 定住生活の意義
	⑤ 縄文文化の地域性
	⑥ 民族誌からみた縄文文化
2 定住生活の進展	⑦ 計画的な食料の調達
	⑧ 高度な植物利用技術
	⑨ 高度な動物利用技術の発達
	⑩ 計画的な土地利用
	⑪ 交易・交流ネットワークの発達
	⑫ 各地の集落と社会
3 縄文の家族と社会	⑬ 縄文人の一生
	⑭ 当時の家族像
	⑮ 特別な人々の出現
4 縄文人の「おそれ」・「いのり」・「まつり」	⑯ けが・病気と災害
	(1) 災害への対応
	(2) 縄文人のけが・病気
	⑰ 縄文人の死生観
	⑱ 再生・循環の「いのり」と「まつり」
	⑲ 縄文人の祖霊祭祀
5 東アジアの中の縄文文化	⑳ 大陸との接触

III 弥生文化誕生

ガイダンス	弥生期の環境変動
[コラム] れきはくサイエンス・ラボ	圧痕から復元した動植物
1 東北アジアの文明化と朝鮮半島	① 朝鮮半島の農耕社会化
	② 縄文後・晩期
	③ 列島各地の初期水稻農耕
2 農耕社会の成立	④ 列島の鉄器文化
	⑤ 武器と戦い
3 西と東のまつり	⑥ 西のまつり
	⑦ 東のまつり
4 弥生の暮らし	⑧ 弥生のむら
	⑨ 弥生の墓
	⑩ 弥生の自画像
[コラム] 弥生 VS 縄文	弥生 VS 縄文
5 4つの文化へ	⑪ 北縁、南縁の水田稲作文化
	⑫ 北の文化、南の文化
	⑬ 弥生文化とはなにか

Ⅳ 倭の登場

1 東夷世界へのまなざし	① 漢と倭 ② 魏志倭人伝の航海記録
2 1～2世紀の東アジア	③ 中国王朝の世界—漢— ④ 朝鮮半島の世界—楽浪と三韓— ⑤ 南北市羅の世界—壱岐・対馬— ⑥ 金印かがやく世界—九州北部— ⑦ 東西海廊の世界—日本海— ⑧ しまなみの世界—瀬戸内海— ⑨ 平野ひろがる世界—近畿— ⑩ やまなみの世界—東海・中部・関東—
3 倭王への道	⑪ 倭王への道

Ⅴ 倭の前方後円墳と東アジア

1 前方後円墳と倭王権	① 前期の古墳 ② 中期の古墳 ③ 後期の古墳
2 地域社会の景観	④ 王をめぐる風景 ⑤ 集落での生活 ⑥ 時代を変える新たな技術
3 倭の境界と周縁	⑦ 倭の北縁と北方世界 ⑧ 倭の南縁と南方世界 ⑨ 朝鮮半島の倭系古墳
4 境界を越えて—アジアという世界—	⑩ アジアの王権 ⑪ 王権の天下観

Ⅵ 古代国家と列島世界

1 自然環境と災害	① 自然環境 ② 災害
2 倭国から日本へ	③ 仏教伝来と古墳の終末 ④ 飛鳥と難波、藤原京 ⑤ 「日本」建設
3 律令支配と列島世界	⑥ 都の明と暗 ⑦ 古代の集落と役所 ⑧ 古代国家の北と南 ⑨ 東アジアのなかの列島世界
4 中世の胎動	⑩ 中世の胎動

副室1 沖ノ島・特集展示

1 沖ノ島の航路と祭祀
2 祭祀の変遷
3 沖ノ島からみた国際交流
4 先史・古代の国際交流
特集展示

副室2 正倉院文書

1 役人の生活	① 写経生の生活 ② 役人の生活
2 正倉院文書の世界 正倉院模型 正倉院文書特集展示	③ 公文書の世界 ④ 写経所文書の世界

図の再検討とともに、2016（平成28）年度から始まる展示工事の準備として各テーマの諸費用や展示工事費用の再検討が行われた。その結果、第1室再開室時においては、外国語表記を英語のみとして中国語と韓国語の翻訳を先送りすること、大テーマサインを点字表記なしのパナーに変更すること、デジタルコンテンツの取り付け金具、機器類やソフト開発を先送りすること、大テーマⅥの一部の展示コーナーと副室の沖ノ島および正倉院文書の展示を先送りすることなど、未完成のまま再開室することが館内委員会議で決定された。この決定については、2016年度初めに館内全体にはかって同意を得た後、展示工事を進めていくこととなる。なお、展示工事の開始にともなって、2016年5月9日（月）から第1室を閉室した。

展示資料に関しては、2015年度も実物資料の長期借用にかかわる各研究機関との調整が進められ、同時に複製資料や大型模型の製作が実施された（図2）。

【第1室リニューアル委員会】

全体会議

- ・ 2015年7月11日・12日

議事：展示設計提案書、各テーマ構成、展示予定資料、展示資料配置図（平面図・展開図）、サイン・グラフィック、映像コンテンツの検討

館内委員会議

- ・ 2015年4月27日、5月25日、6月29日、7月27日、9月28日、10月26日、11月30日、12月21日、2016年1月25日、2月29日、3月28日

議事：各テーマの詳細設計、予算進捗状況、展示工事など今後の実施計画についての検討

【展示設計打ち合わせ】

全体打ち合わせ（第1室全体の展示配置、製作物、照明、予算等について検討）

2015年4月27日、5月18日、6月18日、7月21日、8月28日、9月4日、9月30日（展示設計提案書一式の納品）

映像等デジタルコンテンツ打ち合わせ（製作全般の検討）

2015年6月15日、11月25日

テーマ別打ち合わせ

大テーマⅠ：2015年4月8日、5月19日、2016年1月27日

大テーマⅡ：2015年4月10日・28日、5月29日、2016年1月27日

大テーマⅢ：2015年4月8日、7月10日・17日・23日、2016年1月25日、2月10日、3月10日

大テーマⅣ：2015年4月17日、2016年2月1日

大テーマⅤ：2015年4月17日、2016年2月3日

大テーマⅥ：2015年4月9日、2016年2月5日

副室1 沖ノ島・特集展示：2016年2月1日

副室2 正倉院文書：2015年4月8日・21日、5月25日、2016年1月25日

3 資料製作活動の概要

1) 複製資料と模型の制作目的

2013年度〔渋谷・大塚, 2015〕および2014年度〔渋谷・上, 2016〕に引き続き、2015年度も可能な限り実物資料の借用を試みて、展示予定の複製資料の製作、模型の制作や改修を随時進めてきた。ここでは2015年度に制作された資料のうち、大テーマⅥ（古代国家と列島世界）の展示予定資料である羅城門周辺の動物模型を取り上げ、どのような調査を経て制作されたのかを報告する。なお、同年度には大テーマⅠ（最終氷期に生きた人々）のナウマンゾウ生体復元模型の制作も行ったが、こちらについては来年度の報告に記載したい。

2) 羅城門周辺の動物模型制作

制作資料の概要

大テーマⅥでは、「日本」の成立期前後の律令支配と同支配下の人々の暮らしに焦点を当て、小テーマ「都の明と暗」のコーナーに平城宮羅城門模型（1/10スケール）と、同縮尺の動物模型を展示する予定である。羅城門模型は、律令国家を象徴する展示物として開館以来公開されてきている。次期展示でも引き続きこの模型を配置し、そこに動物模型（ウマ・シカ・ネコ・インコ各1匹、イヌ・ネズミ各3匹）を加え、儀式などに使用されず少しうらぶれた感じのする平常時の羅城門を展示することになった。

模型の制作は、本館 林部 均教授の主導の下、東海大学の丸山真史氏に監修へ加わって頂き進めた。制作に先立ち、各動物の復元根拠となる資料や記録類に関する調査を実施し、①動物種の選定、②配置とポーズ、③サイズと外形、④毛柄、⑤付属品について検討を行った。以下では、各検討結果と模型制作の工程について述べる。

動物模型に関する検討

①動物種の選定

選定に当たっては、平城宮および周辺遺跡で出土した種を参考にし、ウマ *Equus caballus*・ニホンジカ *Cervus nippon*・イヌ *Canis lupus familiaris*・クマネズミ *Rattus rattus* の4種に候補を絞り込んだ。この他に、イエネコとインコも加えた。

イエネコ *Felis silvestris catus* については同地域に出土例がないものの、弥生時代中期のイエネコ遺体の出土例〔納屋内・松井 2008, 2011〕や古墳時代の考古資料の出土例〔丸山ほか, 2011〕など、奈良時代以前にも日本列島にイエネコが存在していた可能性を示す資料が確認されている点を鑑みて加えることにした。

インコについては動物遺体自体の出土例はないものの、当時、オウムが交易品として移入された可能性を示唆する資料〔奈良国立文化財研究所, 1986〕や記録〔磯野, 2007〕が確認されている。そのため、当初はオウムを制作する予定であったが、同種の自然分布域がオーストラリア大陸やニューギニア島周辺に限られ当時の交易圏から遠く離れる点、「鸚鵡」文様と呼ばれながらもホンセイインコ属 *Psittacula* spp. の形態的特徴を表す資料が多数確認されている点〔柿澤ほか, 2000〕、当時は

オウムとインコが混同されていた可能性を指摘する論考〔柿澤ほか, 同掲, 細川, 2012〕等を考慮し、ここではオウムではなくインコを制作することにした。⁽⁴⁾制作の際に参考とした種は、中国大陆南部にも自然分布するオオホンセイインコ *Psittacula eupatria* である。

展示テーマに沿って選定した上記6種のうち、2種は野生動物（ニホンジカ・クマネズミ）、4種は家畜（ウマ・イヌ・イエネコ・インコ）である。羅城門が都の中心地から離れるとはいえ、当時も狩猟対象であった野生動物のニホンジカが都に迷い込んで家畜に混在するという設定には多少の無理があるかも知れない。しかしながら改装後の普及活動では平常時の羅城門の様子について説明することを目的にこれらの動物模型を用いた展示を立案してきたことから、現在の奈良公園でも地元や観光客に親しまれる同種を選定した。

②配置とポーズ、付属品

シカについては、先述の理由からも堂々と門に立ちはだかるという設定は避けた。秋に群れから離れ単独行動をしているオスが門の脇に現れ、周囲の動物の存在に気づき驚いて逃げ出す、その直前のシーンを表現し、物音に振り返るポーズをとらせることにした。驚いて尻尾がピンとたち、ハート形の白い尻斑を目立たせている。

ネズミは、3匹のうち2匹を門の片隅で食物を探しているポーズに決定し、1匹は地面を這い、もう1匹は2本足で立ち上がり辺りを窺う様子にした。残りの1匹はネコから逃れるために門の屋根を全速力で走っているシーンを表現し、四肢が宙に浮く瞬間のポーズをとっている。

ウマについては律令制下で役畜として繁殖管理がなされていることから、展示中ではヒトの介在を示唆する配置とポーズにした。ここでは税である米を地方から運び込む荷駄馬として設定し、同種に限り米俵や木簡、馬具などの付属品を伴わせることにした。米俵は『続日本紀』の記述に基づき1俵約50kgの米俵を3俵背負わせ、2俵をウマの背で左右に振り分け、残り1俵はその中央部に置いた。⁽⁵⁾観覧者側に当たる右の俵には荷札木簡をつけた。木簡の上端部分の切れこみに紐をかけ、下部を米俵に差しこんだ状態で都まで運ばれてきたが、途中で抜けてしまい米俵からぶら下がる様子を表している。馬具は石山寺縁起絵巻を参考に最小限に止め、手綱、胸繫から尻繫部分に綱を渡すのみにし、面繫部分には「オモゲー」と呼ばれるウマを制御する左右一対の道具〔松井, 2010〕を装着した。⁽⁶⁾また、障泥の代わりにむしろを掛け、腹帯に綱を回し、ウマの背に鞍を載せるなど、いずれも簡素な馬具にしている。都に到着し、門の手前で休息をとり道端の草を食んでいるシーンを設定し、荷物を積んだまま口元を地面に近づけるところを表現している。

イヌやネコは、現代でも時折問題になるように、繁殖管理が厳格になされない緩やかな飼育状況下では再野生化しやすく、ヒトの手の及ばないところでも繁殖を繰り返す。特に、ネコは性成熟が早く、1世代あたり8匹の仔ネコを出産すると仮定した場合、雌ネコ1匹から7年間で約175,000匹に増えるとの試算があり、野生下でも個体群を維持できる可能性も指摘されている〔長嶺, 2011〕。当時の一般的な飼育方法は明らかではないものの、雌ネコを繋留して飼育したとしても、発情期にひとたび脱走に成功すれば高確率で妊娠し飼い主の元へ戻る可能性が高い点や、古代社会においてもノラネコが存在していた可能性が指摘されている点〔林ほか, 2003〕などを考慮し、ここではネコについても半ノラないしノラと設定することにした。ネズミを発見し屋根まで追い詰めるシーンを表現し、爪を出し獲物を捕らえる瞬間のポーズにした。イヌについては、野犬として群れを成し門の

ところで食べ物を漁るシーンを表し、そのうち1匹はウマの荷に止まるインコへ目を向け、観覧者へ注意を促すようにしている。

この他、インコについては、宮中で飼われていたものが偶然逃げ出したという設定にした。門までたどり着いたところで、ちょうど休息中だったウマの積荷を止まり木代わりに一休みしているシーンを表現している。

③サイズと外形、体色

雄シカは現代のニホンジカの成獣サイズを参照し〔阿部ほか, 2008〕, 頭胴長約130mmと肩高約90mmにした。シーンを秋に設定しているため、4尖の枯れ角をもち冬毛をまとい、少し太めの体躯にしている。

クマネズミも同様に現生のサイズを参照した〔阿部ほか, 前掲〕。頭胴長約15mm, 灰褐色の体色にしている。

ウマは木曾馬〔松井, 1999〕や平城京跡のウマの体高推定結果〔西中川ほか, 1991〕を参考に、体高130mmにした。毛色については全体を栗毛色、たてがみや尾、鼻先、四肢の先端部分を黒色の鹿毛にして、積荷を運んできて足元が泥で汚れている様子を表現した。また、米俵や木簡、綱類などの付属品も同様に、少し使用感をつけた色合いにしている。

古代のイヌのサイズについては不明な点が多い。今回は、縄文・弥生時代や中世のイヌの体高推移〔西本, 2008〕を参考に、3匹とも体高約43mmにした。いずれも野犬として設定したため、痩せ気味の体躯にしている。体色は淡黄色から赤褐色にかけた中間的な毛色にし、尻尾はいずれの個体も差し尾である。

ネコは弥生時代のイエネコ模型を制作した際の成獣の数値〔渋谷ほか, 2016〕を参考に、頭胴長約50mm, 肩高約25mmにした。改装後の普及活動では弥生時代のイエネコ模型と併せて用いることを目的に、毛色も同模型と全く同じ白黒斑（ブチ）に配色している。

インコは先述の通り、オオホンセイインコ〔国立環境研究所, 2009〕を参照し全長約55mmにした。淡緑色、肩羽に赤褐色の斑、頭部を囲むように黒色と短桃色をリング状に配色し、オスの体色を表現している。

模型の制作

上記の検討結果に基づき、今年度後半期より模型制作を開始した。まず、各動物の1/10スケールの側面図を基にして簡易模型を制作し、実際に現展示の羅城門模型に配置した上で、ポーズやサイズなどを確認、模型の接着点を調整した（図3）。次いで、粘土製の原形模型を制作し、サイズや肉付き、ウマ模型の付属品の配置等について修正を重ね（図4：1）、原形の完成を目指した。外部形態や毛並みを含めた細部の調整まで終了したところで（図4：2, 3）、この原形模型を基にシリコン樹脂製の型を起こし、FRP樹脂を流し込み成形する。最後に、完成模型に彩色を施すことで体色を表現し完成に至った（図4：4～8）。

4 第1室リニューアル展示プロジェクト委員

第1室リニューアル展示プロジェクト委員は下記の通りである。所属・役職は2016年4月時点の

ものである。

＜館内＞

藤尾慎一郎	国立歴史民俗博物館	研究部	教授（代表）
松木 武彦	国立歴史民俗博物館	研究部	教授（副代表）
上野 祥史	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
小倉 慈司	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
工藤雄一郎	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
鈴木 卓治	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
高田 貫太	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
西谷 大	国立歴史民俗博物館	研究部	教授
仁藤 敦史	国立歴史民俗博物館	研究部	教授
林部 均	国立歴史民俗博物館	研究部	教授
三上 喜孝	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
村木 二郎	国立歴史民俗博物館	研究部	准教授
山田 康弘	国立歴史民俗博物館	研究部	教授
渋谷 綾子	国立歴史民俗博物館	研究部	特任助教(2015年6月まで, 7月より別のプロジェクトへ異動)

＜館外＞

小畑 弘己	熊本大学文学部	教授
亀田 修一	岡山理科大学総合情報学部	教授
川尻 秋生	早稲田大学文学学術院	教授
設楽 博己	東京大学文学部・大学院人文社会系研究科	教授
瀬口 眞司	公益財団法人滋賀県文化財保護協会	企画調査課 副主幹
谷口 康浩	國學院大學大学院文学研究科	教授
堤 隆	浅間縄文ミュージアム	主任学芸員
菱田 哲郎	京都府立大学文学部	教授
森 公章	東洋大学文学部	教授
吉田 広	愛媛大学ミュージアム	准教授
若狭 徹	高崎市教育委員会文化財保護課	係長
若林 邦彦	同志社大学歴史資料館	准教授

おわりに

第1室リニューアルは、2014年度から実施設計図を作成する日展が加わったことにより、いわば2次的な展示構成案から立体的かつ具体的な展示構成案へ集約され、2015年度は実施設計が完成した。展示資料や解説パネル、写真図版などのグラフィック、映像等の製作については、2015年度も継続して行われた。これらの資料製作に関わる調査からは、本稿の3で述べたように、さらなる調査研究を促進することも判明した。

2016年度は5月に第1室を閉室し、また写真撮影やビデオ撮影によって現在の展示室の記録を残す作業も行われており、展示工事が順次進められている。本稿と同じく、第1室リニューアルの活動を随時報告していくつもりである。

謝辞

模型制作にあたって、以下の方々にご指導を賜り、資料や文献等をご教示頂きました。末筆ながら記して深く感謝申し上げます（敬称略・五十音順）。

江田真毅、遠藤秀紀、金 憲爽、佐藤タクヤ、鈴木三男、根本真吾、林部 均、藤尾慎一郎、丸山真史、三上喜孝、桃崎祐輔、横田あゆみ

註

- | | |
|---|---|
| (1)——丸山真史氏のご教示による。 | (4)——過去の企画展 展示図録〔奈良国立文化財研究所, 1998〕にも、オウムに特徴的な冠ばねを持たず、淡緑色の体色と長い尾羽等のインコの特徴を持つトリが飼育されている様子が描かれている。 |
| (2)——兵庫県姫路市四郷町見野古墳群の横穴式石室からの副葬品には、ネコの可能性の高い足跡付きの須恵器(6世紀末～7世紀中頃)が確認されている。 | (5)——三上義孝氏のご教示による。 |
| (3)——天平末年(8世紀半ば)頃、短期間に投棄され埋め戻されたと考えられている土坑 SK820 から土師器杯が出土し、「採る莫れ」「鸚鵡鳥坏」との墨書が確認された。 | (6)——丸山真史氏のご教示による。ハミを噛ませずにウマの両頬を挟み紐を通す。 |

引用文献

- 阿部 永 (監修). 2008. 日本の哺乳類 (改訂2版). 東海大学出版会, 神奈川
- 磯野直秀. 2007. 明治前動物渡来年表. 慶應義塾大学日吉紀要 自然科学 41: 35-66
- 柿澤亮三・平岡 考・中坪禮治・上村淳之. 2000. 宝物特別調査 鳥の羽毛と文様. 正倉院紀要 22: 1-28
- 国立環境研究所 HP. 2009. 侵入生物データベース.
<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/20090.html>
- 渋谷綾子. 2014. 国立歴史民俗博物館総合展示第1室(原始・古代)の新構築事業—2012年度活動報告. 国立歴史民俗博物館研究報告 186: 277-293.
- 渋谷綾子・上奈穂美. 2016. 国立歴史民俗博物館総合展示第1室(原始・古代)の新構築事業—2014年度活動報告一. 国立歴史民俗博物館研究報告 201: 25-40.
- 渋谷綾子・上奈穂美. 2016. 国立歴史民俗博物館総合展示第1室(原始・古代)の新構築事業—2014年度活動報告. 国立歴史民俗博物館研究報告 201: 25-40
- 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館. 2004. 国立歴史民俗博物館総合展示リニューアル基本計画. 59 pp. 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館, 佐倉市.
- 長嶺 隆. 2011. イエネコ—もっとも身近な外来哺乳類. 日本の外来哺乳類—管理戦略と生態系保全, 東京大学出版会, 東京
- 奈良国立文化財研究所. 1986. 平城宮発掘調査報告Ⅶ 奈良国立文化財研究所学報 第26冊. 真陽社, 京都
- 奈良国立文化財研究所. 1998. 「なら平城京展'98」図録. 奈良市
- 納屋内 高史・松井 章. 2008. カラカミ遺跡出土の動物遺存体. 沓岐カラカミ遺跡Ⅰ—カラカミ遺跡東亜考古学会第2地点の発掘調査—平成19年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究B(2):129-144.
- 納屋内 高史・松井 章. 2011. カラカミ遺跡出土の動物遺存体(まとめにかえて). 沓岐カラカミ遺跡Ⅲ—カラカミ遺跡第1地点の発掘調査(2005～2008年)—:157-163
- 西中川 駿・松元光春. 1991. Ⅱ. 遺跡出土の牛, 馬の骨の形態計測学的研究. 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛, 馬の渡来時期とその経路に関する研究—平成2年度文部科学省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書:18-41
- 西本豊弘. 2008. —イヌと日本人. 人と動物の日本史1—動物の考古学:180-191
- 林 良博 (監修). 2003. イラストでみる猫学. 講談社, 東京

細川博昭. 2012. 江戸時代に描かれた鳥たち. ソフトバンククリエイティブ, 東京

松井 章. 1999. 第10章 家畜その2—ウマ・ウシ. ②考古学と動物学 :169-208

松井 章. 2010. 豊後府内遺跡出土のオモゲーとその問題点. 坪井清足先生卒寿記念論文集 一埋文行政と研究のはざま
で一:1276-1284

丸山真史・馬場基・松井章 2011. 須恵器に残された動物の足跡. 立命館大学文学部学芸員課程研究報告 13 姫路市見
野古墳群発掘調査報告 :173-176

渋谷綾子 (国立歴史民俗博物館研究部)

上 奈穂美 (国立歴史民俗博物館・技術補佐員)

(2016年4月22日受付, 2016年10月17日審査終了)



大テーマⅡ 複製資料の納品検査



大テーマⅢ 造作物の納品検査



大テーマⅤ 複製資料の納品検査



大テーマⅤ 複製資料の納品検査



大テーマⅥ 大型模型(左)と複製資料(右)の納品検査

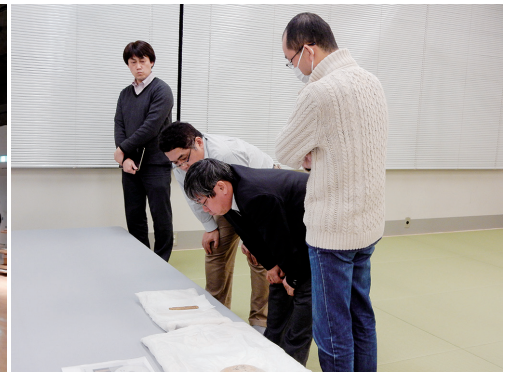


図 2 2015 年度に製作した展示予定資料(複製資料, 造作物, 大型模型)の例

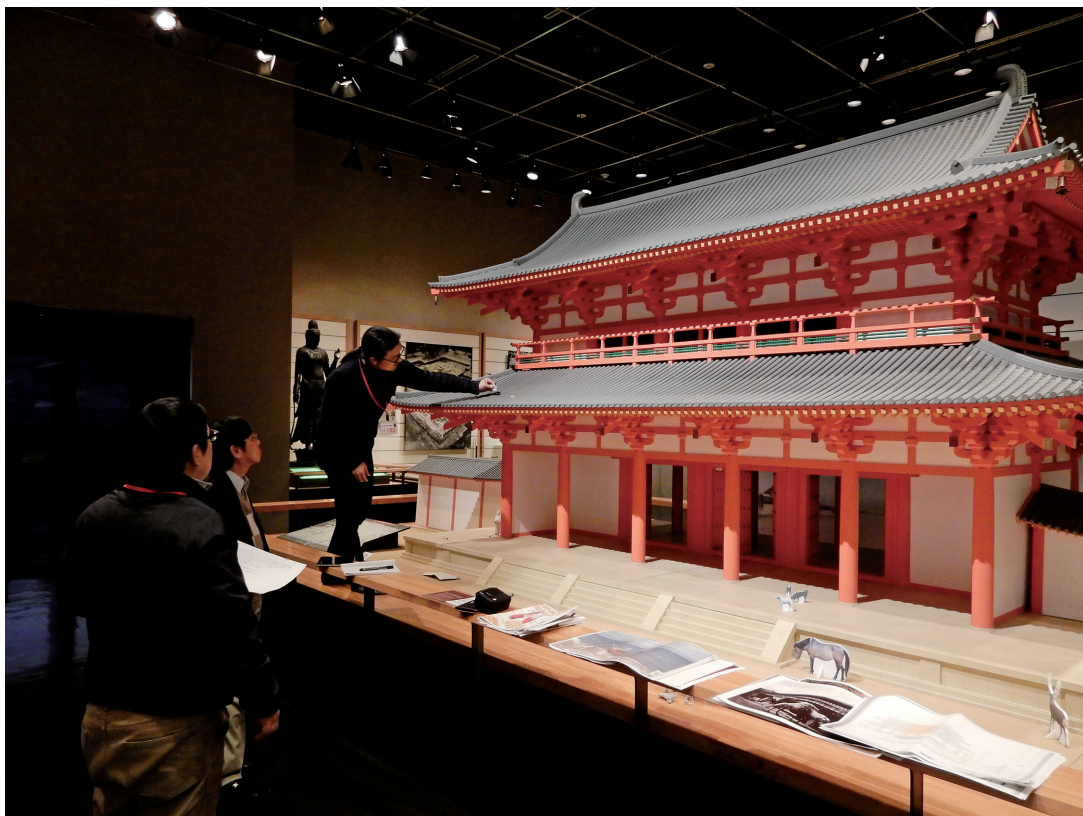


図 3 羅城門周辺に配置予定の動物模型制作(簡易模型の配置確認)



1 原形模型(粘土製)の修正確認



2 原形模型(ウマとインコ)



3 原形模型(その他の動物)



4 完成模型(ウマとインコ)



5 原形模型(シカ)



6 原形模型(イヌ)



7 原形模型(ネズミ)



8 原形模型(ネコとネズミ)

図4 羅城門周辺に配置予定の動物模型制作写真